

令和 5 年 4 月 29 日現在

機関番号：14401

研究種目：研究活動スタート支援

研究期間：2020～2022

課題番号：20K21931

研究課題名（和文）小沢昭一における音楽芸能の正統性の概念の研究：LP作品集『日本の放浪芸』を中心に

研究課題名（英文）A Study of the Concept of Legitimacy of Musical Performing Arts in Shoichi Ozawa : The Case of the LP Record Collection "Document / Itinerant Arts of Japan"

研究代表者

鈴木 聖子 (SUZUKI, Seiko)

大阪大学・大学院人文学研究科（人文学専攻、芸術学専攻、日本学専攻）・助教

研究者番号：80754259

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,200,000円

研究成果の概要（和文）：1970年代、俳優の小沢昭一は、ビクターのディレクター市川捷護の依頼でLP『ドキュメント 日本の放浪芸』を制作した。当時多くの音楽学者から無視されていた放浪の芸能者を録音して収録した。日本演劇史の河竹繁俊は、天岩戸の前でエロティックな踊りを披露した天宇受売を日本最初のストリップ俳優と位置付けた。この解釈は、戦前の皇室思想からの解放を意味するだけでなく、ストリップの正統性を示すものであった。河竹の弟子である郡司正勝は「放浪の芸能」という類型を提示した。本研究は、小沢がこれらの前衛的な視点を取り込み、俳優としてのアイデンティティを探究するドキュメンタリー・レコードを実現したプロセスを明らかにした。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究は、1970年代に無形文化財保護の在り方を批判した小沢昭一のLP『ドキュメント 日本の放浪芸』に関する資料を収集し、制作関係者への聞き取り調査を行い、同時代の聴覚メディア作品（ラジオ劇・実録レコード・朗読等）と比較検討しながら、この作品の誕生した文脈とそこに具現化された小沢の音楽芸能の正統性の概念を明らかにした。これまで『日本の放浪芸』のみならず、小沢を対象とするまとまった研究も行われてこなかった。とりわけ多くの愛好者を持つ彼の聴覚メディア作品に着目し、また「伝統音楽」「伝統芸能」「民俗芸能」の枠では扱いにくい作品を考察の俎上にのせた点で、小沢研究を開拓するものとして学術的創造性をもつ。

研究成果の概要（英文）：In the 1970s, at the request of Victor's director Katsumori Ichikawa, actor Shoichi Ozawa created a LP disc collection entitled "Document : Itinerant Arts of Japan". He recorded spectacles which were faced with threats of extinction, such as vagabond musicians who were ignored by many academic musicologists at that time. Shigetoshi Kawatake, professor of Japanese theater history, stated in his lecture that the goddess Ame-no-Uzume, who performed an erotic dance in front of the cave Ama-no-Iwato in Japanese imperial mythology, was the "first strip-tease performer" in Japan. This interpretation not only marks the liberation of imperial pre-war thought, but also the legitimization of striptease. Furthermore, Kawatake's disciple Gunji Masakatsu created the category of Itinerant arts. This study clarified the process by which Ozawa incorporated these avant-garde perspectives into his LP collection, resulting in a documentary record that explores his identity as an actor.

研究分野：日本音楽史・文化資源学・聴覚文化研究

キーワード：文化資源学 ドキュメンタリー 無形文化財 文化財保護 環世界 伝統芸能 レコード 聴覚文化

科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## 1. 研究開始当初の背景

近代日本における日本音楽研究は、「西洋音楽」に比肩しうるとされた高尚な「伝統音楽」「伝統芸能」を対象として発展した。1980年代になって、東京芸術大学の塚原康子や細川周平らが西洋音楽の日本への土着化の様相を明らかにしはじめ、近年では日本の様々な「音」が対象とされるようになってきた。だが、高尚な「伝統音楽」「伝統芸能」は、現在も文化財保護法(1950年制定)の「重要無形文化財」の中に残る。問題は、この制度が指定要件として正統な担い手を固定するため、指定要件から外れた担い手が切り捨てられることであり、その結果、正統な側の担い手の負担も過度に大きくなることである。申請者は、保護制度における正統性の概念を理解するため、戦前に日本音楽研究の基礎を築いた田辺尚雄の仕事进行分析し、それが保護制度の基準に与えた影響を明らかにした(博士論文『「科学」としての日本音楽研究：田辺尚雄の雅楽研究と日本音楽史の構築』、東京大学、2014年。『雅楽の誕生：田辺尚雄が見た大東亜の響き』、春秋社、2019年〔第41回サントリー学芸賞〔芸術・文学部門〕受賞〕)。

一方、戦後の動向を見ると、確かに「伝統音楽」「伝統芸能」は保護制度を媒介の一つとして引き継がれたが、田辺の弟子にあたる吉川英士や岸辺成雄の1950年代の言説を見ると、保護制度に「わざ」の担い手への配慮が不足しているのは行政が見切り発車的に制度を進めたからだ、という批判が認められる。1960～1980年代前半には「西洋音楽」に偏重した文部省の音楽教育を批判した小泉文夫が、ラジオやテレビで民謡や民族音楽を魅力的に語って大衆を魅了し、その人気は今も残る。つまり戦前と比較して学知と一般の知の間の境界は薄れたといえる。戦後の吉川から小泉までの学知については、既に福岡正太「小泉文夫の日本伝統音楽研究：民族音楽学研究の出発点として」(『国立民族学博物館研究報』、28(2)：257-295, 2003年)の考察がある。福岡論文を出発点とし、近接領域の学知と一般の受容の問題系に着目することで、保護制度における正統性の問題を現在に継続させる様々に重なり合った文脈や力学を明らかにすることができる。と考へた。

以上のことから、本研究は、1970年代に新劇俳優の小沢昭一が制作したLPレコード集『日本の放浪芸』(全4作、日本ビクター)を取り上げることにした。小沢はそこに録音収集した「金に換える芸」を担う人々のマイノリティ性・放浪性をもって、文化庁(1968年設置)が無形文化財保護制度において、高尚な「伝統音楽」「伝統芸能」や農村や都市の「民俗芸能」など多数派の定住民に有利な価値基準を用いているとして批判したのである。このLP作品は、同時代の映画監督のドキュメンタリー映画や、フランスの社会運動の文脈で制作されたLP作品に影響を受けていた、日本ビクターのプロデューサー市川捷護との二人三脚で制作された。ゆえにユネスコLPコレクションの様な博物館的で客観的なアーカイブを避け、自身の声のメッセージも収録して主観性を打ち出したという点で、日本の社会運動の時代的産物と言える。だが小沢は十把一絡げに「権力」を批判したのではなく、母校早稲田大学の演劇史研究の河竹繁俊がアメノウズメの「ストリップ」を俳優のわざの起源としたこと、その弟子で民俗学的芸能研究を行った郡司正勝が「放浪の芸能」という用語を作ったことなど、当時の前衛の学知を聴覚メディア作品へと結実させたと考えられた。しかし「民俗芸能」の学知は、『課題としての民俗芸能研究』(民俗芸能研究会・第一民俗芸能学会編、ひつじ書房、1994年)以降いくつかの批判的検討があるが、河竹・郡司・小沢が中心に論じられることはない。『日本の放浪芸』に収録される音楽芸能の録音が、現在では貴重な資料であるにも関わらず、この作品自体が研究対象とされることがなかったのは、このような現在の学知におけるこの作品の位置づけとも関係すると考えられた。

## 2. 研究の目的

現行の無形文化財保護制度は、音楽芸能の指定の際に正統な「わざ」の担い手を認定するため、その認定から外れた担い手に配慮が行われにくくなるという問題がある。申請者はこれまで、こうした保護制度の正統性の概念に影響を与えた、明治期から戦後までの日本音楽研究の学知の形成過程を明らかにしてきた。本研究は、座標軸を戦後の受容に置き、1970年代に保護制度の価値基準への批判として創作された、新劇俳優・小沢昭一のLPレコード集『ドキュメント 日本の放浪芸』を取り上げ、この作品が制作された文脈と、そこに具現化された小沢の音楽芸能の正統性の概念を明らかにすることで、当時の保護制度の受容・限界・可能性を理解し、今後の保護制度の在り方を提示することを目的とした。

## 3. 研究の方法

早稲田大学の芸能関係者、LP『日本の放浪芸』の制作関係者への聞き取り調査を行った。早稲田大学演劇博物館所蔵「小沢昭一旧蔵資料」を閲覧した。LPに録音された音楽と言葉のうち、最も重要と思われるものを選んで、五線譜化・視覚化(採譜ソフト・音声分析ソフトによる)を行った。放送ライブラリーで、同時代の小沢の聴覚メディア作品の資料調査を行った。以上をもとに、聞き取り調査の事実関係のクロスチェックを実施した上で、総合的な分析を行った。

## 4. 研究成果

ビクターの元ディレクター市川捷護氏へのインタビューは2021年11月9、10日、26日の三回にわたって氏の自宅にて行われた。また後日、紹介を頂いた『日本の放浪芸』の関係者の方々を挟んでのインタビューを実施、同年12月15日、小沢の劇団のプロデューサーである小川洋三氏へのインタビューと、小沢の元マネージャーである津島滋人氏への事実確認の協力を、市川氏にもお越し頂き、三名一緒に話を伺った。市川氏には、二回目のCD復刻の際のプロデューサー市橋雄二氏(現・公益財団法人日本伝統文化振興財団理事長)の紹介の労も頂き、2022年5月6日に両氏同席のもとでインタビューを行なった。

インタビューを通して得た基礎情報のなかで特に際立った収穫は、第二作の発売日に関することである。第二作の発売年が1973年であることは、市川捷護『回想 日本の放浪芸 小沢昭一さんと探索した日々』や2015年のCD復刻版の解説書に記載されていたものの、正確な発売日は不明であった。市橋氏に伺ったことで、ビクター内部での資料調査を実施して頂き、当初は1973年11月25日発売(12月新譜)の予定であったものが、何らかの理由で遅延し、1973年12月25日発売(1974年1月新譜)に変更されたようであるとのことが分かった。こうしたケースでは『総目録』などの日付は変更されていないことがあるとのことご教示も頂いた。

LP『日本の放浪芸』の全四作を制作当時の文脈に置き直して制作のプロセスを検討した結果、四作ともがそれぞれの方法で、それぞれに芸能者の「環世界」を、そして小沢自身の「環世界」を描くドキュメンタリー作品であるよう目指されたことが理解できた。小沢は、こうした人の生活をまるごと扱いうる方法を提示することで、人の生活を取り除いた形で芸能に正統性なるものを求める文化財保存の在り方に対して非を唱えたといえる。

研究成果公開として、ホームページで『日本の放浪芸』シリーズの一次資料の公開を行ない、単著『掬われる声、語られる芸 小沢昭一と『ドキュメント 日本の放浪芸』』(春秋社、2023年5月)を刊行した。



## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計6件（うち査読付論文 1件/うち国際共著 1件/うちオープンアクセス 3件）

1. 著者名 鈴木聖子	4. 巻 21
2. 論文標題 1970年代聴覚文化における大道音楽や物売りの声の録音収集の意義：LP『ドキュメント 日本の放浪芸』の文化資源学	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 サウンドスケープ	6. 最初と最後の頁 74-85
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鈴木聖子	4. 巻 55
2. 論文標題 民間の雅楽団体における「わざ」の正統性 園廣教と雅楽道友会の音響空間	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 待兼山論叢：芸術篇	6. 最初と最後の頁 1-28
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -
1. 著者名 鈴木聖子	4. 巻 1
2. 論文標題 Between Narrative and Melody : Meaning of Musical Preaching (fushidan sekkyo) on Shoichi Ozawa's LP collection Document / Itinerant Arts of Japan	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 MEMOIRE SONORE DU JAPON: LE DISQUE, LA MUSIQUE ET LA LANGUE	6. 最初と最後の頁 53-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 該当する
1. 著者名 鈴木聖子	4. 巻 584
2. 論文標題 声と音の芸能史：「小沢昭一的小三治」	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 ユリイカ	6. 最初と最後の頁 211--218
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木聖子	4. 巻 12
2. 論文標題 放浪のサウンド・アーティスト 芸能者としての鈴木昭男	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 Arts & Media	6. 最初と最後の頁 157-159
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 鈴木聖子	4. 巻 13
2. 論文標題 音楽芸能の記録における音と映像の関係 日本ピクチャーの音響映像メディアのアンソロジー (前編)	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 Arts & Media	6. 最初と最後の頁 0-0
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計5件 (うち招待講演 2件 / うち国際学会 2件)

1. 発表者名 Seiko SUZUKI
2. 発表標題 Reflexion ethnographique sur l'authenticite; du gagaku traditionnel hors de l'Agence imperiale: travers la mesure pour le sho dans l'Ensemble Gagaku Doyukai
3. 学会等名 Sheng ! l'orgue a bouche (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 鈴木聖子
2. 発表標題 「ベートーヴェン人生劇場<残侠篇>」(1970)の歴史的意義 - - 『題名のない音楽会』における日本の伝統的な音楽・芸能の役割 - -
3. 学会等名 日本音楽学会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木聖子
2. 発表標題 レコード上のサウンドスケープ：小沢昭一『日本の放浪芸』における音の記憶の再現とその意義
3. 学会等名 日本サウンドスケープ協会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Suzuki Seiko
2. 発表標題 Marginality and Performing Arts: Listening to Striptease on the Record
3. 学会等名 Rethinking Borders through Music: Online Symposium (University of Huddersfield) (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 鈴木聖子
2. 発表標題 音楽芸能の記録と保存における音と映像の関係 日本ビクターの音響映像メディアのコレクションを事例として
3. 学会等名 日本音楽学会
4. 発表年 2022年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 鈴木 聖子	4. 発行年 2023年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 328
3. 書名 掬われる声、語られる芸ー 小沢昭一と『ドキュメント 日本の放浪芸』	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------